

「Dr. ウィリス ベッドサイド診断 病歴と身体診察でここまでわかる！」

松村 理司 著

群星沖縄臨床研修センター長

宮 城 征四郎

この度、医学書院から上記『Dr. ウィリス—ベッドサイド診断学』と言う臨床医学書が出版された。監訳は京都の洛和会音羽病院院長の松村理司先生が担当し、実際には若い医師たちが関わって翻訳に汗を流した力作である。

最後の索引欄まで合わせると実に700ページに迫る、すぐにベッドサイドで役立つ臨床本である。

Dr. Willis は知る人ぞ知る臨床医学の天才である。

評者の45年余りの医師人生の中でも、彼のような臨床の天才にめぐり合えたことは誠に幸せと思う。評者は、沖縄県立中部病院時代、内科指導医としてカナダから赴任してきた彼と30歳代の頃に5年間、共に過ごした経験がある。彼はそのころ、既に40歳台半ばであった。ボルネオのジャングルで開業した経験もあるらしい。

実は彼は医師であると共にキリスト教の伝道師でもある。伝道の傍ら医学を勉強したという経歴の持ち主である。世界のどこにでも出掛け、伝道の傍ら医学を教育する毎日であったという。共に過ごした5年の後、彼はロックフェラー医療団の一員としてエチオピア大学に赴任し、臨床を指導していたと聞く。

その後、当時、舞鶴市民病院で教育指導に当たっていた松村先生のたつての願いを聞き入れて、再び日本に來たわけである。

松村先生とは5年ほど共に過ごしたと聞いている。そういうご縁もあって、彼の個人的な臨床指導書が松村先生一派によってこの度、翻訳の運びとなり、出版されたのが本書である。

その原書がかつて出版されたという話を筆者は聞いたことはない。したがって、日本語になった本書こそが、日の目を見ることになったおそらく最初であろう。

筆者は、沖縄県立中部病院時代は呼吸器疾患を中心とした臨床に携わっていたので、当時、彼の指導書に触れたのは呼吸器疾患に限られていたのであるが、ここに記されている内容を見ると呼吸器、循環器、神経、消化器、内分泌、筋骨格、皮膚、血液、体液・電解質すべてに及び、記載がないのは免疫、感染症、腎臓・膠原病などごくわずかな項目のみである。

しかし、これらの項目についての記載がないからといって、彼がこの分野について不得手であったわけではないと思う。ただ、常々彼は筆者に免疫部門だけは新しい学問なので

十分にはまだ追いついていないと、口癖のように言っていたことを思い出す。

そういう意味では彼は本当の今で言う「ジェネラリスト」であり、彼が記載している各項目に目を通してみると、われわれ日本で専門家と自認している医師にとって驚くべき内容が記載されているのを見出す。

例えばバイタルの解釈では血圧だけの数値症例を10ほど述べているが、それだけから臨床診断が成されていて、生理学を究めていなければ、到底、われわれには思いつかない診断名が挙げられている。

専門家各自が自分の分野の項目に目を通すだけで、彼の臨床家としての天才ぶりが分かるはずだし、また、勉強を通じて一人の医師が、その人生において、これだけ広い分野の知識と技術を習得できることのモデルとして、この本を読むことには大きな意味がある。

ことに内科のジェネラリストを目指している若い人々には必読の書である。

筆者は自信をもってここに推薦する。

●B5 頁720 2008年 定価6,825円
(本体6,500円+税5%)

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)